

上原 美術館 通信

No.
12

編集・発行 公益財団法人上原美術館
2021年1月8日発行(季刊年4回発行)
公益財団法人 上原美術館
〒413-0715 静岡県下田市宇土金341
Tel. 0558-28-1228
www.uehara-museum.or.jp



本展では、新収蔵の二点の仏教美術を初公開します。

濃紺を背景に、美しい装束をまとった二人の童子が舞っています。手前の童子は胡蝶の羽を背負い、奥の童子は鳥の翼を着けていますが、こちらは極楽浄土に住むという迦陵頻伽の扮装。迦陵頻伽は鳥の体に天女のような人の頭を持ち、囀るのではなく、美しい声で歌うとされる想像上の鳥です。こちらを向いた童子の豊かな頬には、上気したかのようにほんのりと朱が差し、足元の銀泥は、まるで舞う二人にスポットライトが当たるような効果を生み出しています。極彩色を身にまっていますが、それぞれの色遣いは濃色から淡色へと移ろう縹緗彩色を基調とし、生み出された穏やかで微妙な色調は豊かで、夢幻の世界に誘うかのようです。この絵が描かれたのは平安時代の終わり。華麗な平安貴族文化の最後の輝きを今に伝える画面です。

実はこの作品は、経巻を開いた冒頭の部分に描かれる見返し絵で、次いで「妙法蓮華経提婆達多品第十二 五」の経題(タイトル)が続きます。妙法蓮華経は二十八品(品は章をさします)八巻からなり、これに開経(プロローグ)にあたりとされる「無量義経」と、結経(エピローグ)とされる「観賢菩薩行法経」をあわせて十巻一組とします。この経題は、本経がそのうちの第十二品・提婆達多品からはじまる巻で、全十巻のうち五巻目にあたることを示しています。

経題に続くのは經典の本文。濃紺に染められた22枚の料紙を継ぎ、総長10m19cmにわたって金泥でびっしりと経文が書写されています。平安時代に量産された写経の中には、正直あまり上手とは言えない文字のものも散見されますが、

本経の文字は一点一画をも疎かにすることなく、その線は、丸みを帯びながらしっかりと太く、豊かで美しいものです。

本経は、平安時代末期、高倉天皇とその皇后、平徳子に仕えた公卿(大臣など国政を担う太政官の高官。上級貴族)、平基親の発願で制作されたことが知られていましたが、今回、末尾に記された奥書から、願主の平基親自ら書写した貴重な自筆写経で、治承4(1180)年7月28日に完成したものであることが分かりました。美しい見返し絵と経文は上級貴族が制作した写経に相応しいものです。ところが、本経を開いて後半にいたると、状況が変わって行きます。均質な深い藍色の料紙に、色あせたものが混じるようになり、金泥の質も落ち、文字の乱れも目に付くようになります。

実は本経を書写し終えた時期の基親は、時代の激流に翻弄されていました。この前年の治承3年11月、平清盛が後白河上皇を幽閉して政権を奪いましたが(治承三年の政変)、平基親はこの時、上皇側の公卿として失脚しているのです。その後、源頼朝が平氏を滅ぼすと、基親は公卿に返り咲き、従三位・兵部卿(軍政をつかさどる兵部省の長官)に就任しますが、本経を書写し終わったころの基親は不遇でした。本経後半の質の低下は、このような状況を反映しているのかもしれませんが。

本展では、本経の前半、美しい見返し絵と、濃紺の料紙に整然と書写された金色の経文が夜空の星のように輝く部分を展示いたします。また併せて江戸前期の後陽成天皇の皇子、尊覚親王が承応元(1652)年4月に書写した『唯識三十頌』も初公開。どうぞご覧ください。(田島)



《紺紙金字法華経 巻五(平基親願経)》治承4(1180)年 新収蔵・当館初公開

コレクター上原昭二が半世紀以上をかけて集めた絵画コレクションには、画家たちのユニークな物語やエピソードをもつ作品が集まっています。それらの中には、作家同士の交流が育んだ作品だけでなく、過去や同時代の作品との出会いによって制作されたものも数多くみられます。本展では、こうした絵画の生まれるきっかけとなった画家や作品との出会いが紡いだ物語を、モネたち印象派の作品などからご紹介いたします。

若き日のオーギュスト・ルノワール(1841-1919年)は、盟友クロード・モネ(1840-1926年)とともに新たな絵画表現を探求していました。再建された鉄道橋を描いた《アルジャントゥイユの橋》(1873年、図1)は、モネも同構図の作品を描いており、二人が同じ場所で切磋琢磨していたことをうかがわせます。そのモネは、葛飾北斎『富嶽三十六景』や歌川広重『東海道五十三次』などの浮世絵を多数コレクションしており、



図1 オーギュスト・ルノワール《アルジャントゥイユの橋》1873年

日本らしさを代表するこの山への憧れを抱いてきました。そうした思いは、ノルウェーに滞在した折に、雪の積もるコルサース山を富士山に見立てた連作として結実します。家族に宛てた手紙には「(筆者註:滞在了)サンドヴィケンの眺めは日本の村に似ています。それから山を描き始めました。ここならどこにいても見える山で、それはフジヤマを思わせます。」と記しています。当館が所蔵する《雪中の家とコルサース山》(1895年、図2)もそうして描かれた作品のひとつであり、モネが愛蔵した浮世絵は、彼が新たな作品を生み出すきっかけとなりました。こうした逸話は、作品に秘められた背景を明らかにし、モネが雪山に込めた日本への深い愛着を我々に教えてくれます。

モネたち印象派に続いたフィンセント・ファン・ゴッホ(1853-1890年)は、ジャン=フランソワ・ミレー(1814-1875年)の描く崇高な農民の姿に心打たれ、彼に私淑していました。当館が所蔵するゴッホの初期デッサン《鎌で刈る人(ミレーによる)》(1880年頃、図3)も、ミレーの『野良仕事』と呼ばれる連作版画を模写したものです。画家として歩み始めた時から晩年に至るまで、ミレーの作品はゴッホの芸術を豊かにする源泉であり続けました。そのほか本展では、セザンヌの絵画から多くの影響を受けたドランやピカソ、安井曾太郎、須田国太郎らの作品も展示します。絵画が紡いだ物語とともに多彩な上原コレクションの魅力をお楽しみください。(齊藤)



図2 クロード・モネ《雪中の家とコルサース山》1895年



図3 フィンセント・ファン・ゴッホ《鎌で刈る人(ミレーによる)》1880年頃

当館では、伊豆半島の仏教美術について、開館以来調査を続けており、近年では仏像の新発見などの成果があらわれています。

昨年度まで、河津町仏教会、河津町教育委員会および文化財保護審議会の協力のもと、河津町内の寺院悉皆調査を行いました。この調査の中で、仏像からは平安時代に遡るもの、また永徳3(1383)年の銘をも

つものなど、貴重な作例の発見がありました。絵画では江戸時代中期の涅槃図などが確認され、改めて河津町内の中世から近世の様子がうかがい知れるようになりました。寺院が主な調査範囲でしたが、神社の調査が叶う場合もあり、今回はこの神社調査の中から見出された^{いば ぼてんじんじや}筏場天神社の「天神図」をご紹介します。

^{すがわらのみちざね}菅原道真は平安時代(9世紀後半頃)に活躍した人物で、醍醐天皇の頃には右大臣にまでのぼりつめた人物ですが、謀反を企てたと^{ざんげん}讒言があり、九州の大宰府へと左遷され、この地で生涯を閉じました。道真の死後、朝廷では変事が重なり、人々はこれを道真の怨霊がおこしたと解釈し、以後、怨霊を鎮めるため、天神として祀られるようになりました。

本図は天神として信仰されるようになった、菅原道真を描いた図で、縦41cm、横48.1cmの板に描かれています。道真は画面中央、むかって左向きに座り、両手で笏の上部を掴んで押さえるように膝の上に立て、^{そくたい}束帯を着けた姿で描かれています。その左には紅白の梅の木が配されます。梅の木の枝は



《天神図》永享10(1438)年 河津町・筏場天神社



《天神図》裏面の墨書

道真の頭上を通り、右上方にまで枝を伸ばしています。梅は、道真が大宰府へ赴く際に、庭木として愛でていた梅が、道真を慕って大宰府まで飛んだという伝説から、道真を描く際に必ずといっていいほど描かれる象徴的なものです。また通常、道真は畳の上に坐す、もしくは縄を円座にまとめた上に坐していることが多いのですが、本図では何も描かれず、直に座っています。道真の顔はかなり^{はくらく}剥落が進み、^{めんぼう}面貌表現も詳しくはうかがい知ることが出来ません。赤外線で見ると、剥落してしまったところ以外がはっきり確認出来、どうやら怒りの表情を浮かべる「怒り天神」と言われる図様のようです。

本図の裏面には、墨書で何か記されており、読み取ると以下のように記されていました。「涓取三月十六日就口賣社前/林際精舎一會海衆諷經/林間山麓天神古廟歲月久之矣/風雨侵壞敢堪坐視也爰林間/菴主妙休化門一時打開左右/皆旦越躬自操鄧斤新葺不/日口成如之圖/北埜異像奉安置寶殿者也/豈永享龍集戊午季春十六日」(※口は判読不能。/は改行)。この墨書から、本図は

永享10(1438)年に描かれており、天神の古廟が壊れたので、妙休という僧が中心となり、屋根を葺き、建物を直したということが分かります。また後半に「北埜異像奉安置寶殿者也」とあるので、京都の北野天満宮に伝来する天神像とは異なる像を宝殿に安置したようです。北野天満宮に現在伝来する画像は、顔をむかって右向きにし、^{なえしやう}萎装束という丸みを帯びた装束を身に着けています。南北朝時代以降に描かれたものとされており、現存の画像の根本となった図も同じような図様であったと考えられています。本図と比べると顔の向きや、服装も異なっていますので、河津の天神社の図が「北野の異像」であると言えるでしょう。

中世まで遡る絵画は非常に貴重で、伊豆南部地域でもほとんど見ることはありません。今回調査を行った河津町内では、最古の遺例であり、また河津の歴史を考える上でも重要な作例です。

※本図は非公開です。

1895年2月1日、50代半ばのモネは汽車と船を乗り継いでノルウェーを訪れ、数々の名作を生み出します。この頃はモネにとって円熟に向かう転換の時期でした。前年にはルーアン大聖堂の連作を制作、春にデュラン=リュエル画廊で展覧会を開催すべく準備を進めていました。こうした中でモネは旅の計画を立てます。当初は旅先をヴェニスかノルウェーで迷ったといいますが、1895年1月16日、画家ピュヴィス・ド・シャヴァンヌの誕生祝賀会で出会ったノルウェー出身の画家フリッツ・タウロウの影響もあり、ノルウェーに行き先を決めたようです(文献2)。

1895年1月28日、モネは汽車と船を乗り継いで北へ向かいました。旅程は当時の有名なガイドブック『ベデカ』を参考にしたいといいますが(文献1)、旅の様子は途中で妻に送った2通の手紙から知ることができます(書簡1263, 1264)。モネは汽車でフランスからドイツのケルンを經由して、バルト海に面したキールに到着。キールからデンマークのシェラン島に渡る船は氷や雪に阻まれ、大幅に遅れました。シェラン島の西岸コアサーからは汽車で東岸ヘルシゲル向かいますが、同地に到着すると予定の船は既に出発、次の便を待たなければなりません。船を待つ間、モネは深夜に前述の妻への手紙の一つ、対岸のヘルシゲルに渡ってもう一つ書きました。スウェーデンのヘルシゲルから汽車に乗り換えますが、またしても風雪に見舞われ、ノルウェーの首都クリスチャニア(現・オスロ)に到着したのは予定より半日遅れの2月1日夜でした。

クリスチャニアでは義理の息子ジャック・オシュデが迎えました。ジャックはノルウェー人と結婚して同地に暮らして

おり、滞在中はモネの案内役を務めます。モネはマイナス30°Cの寒さをもともせず、時には^{そり}橇に乗ってモチーフを探します。モネは「ノルウェーの人は私より寒がりだ驚いた」(書簡1274)とも述べています。意欲的にモチーフを探しますが、思うような場所がなかなか見つかりません。さらに人々の訪問も多く、制作ができないまま日々が過ぎます。2月18日の妻に宛てた手紙では、「まだ仕事ができない」と嘆いています(書簡1270)。

ジャックの知人の紹介でようやく見つけた場所は、クリスチャニアの西10キロほどの場所にあるサンドヴィーケン(Sandviken)近くの、芸術家村のような集落ビョルネゴール(Bjornegaard)でした。モネはこの地に滞在し、周囲の風景を描きます。2月26日に友人ギュスターヴ・ジェフロワに宛てた手紙では「ついに、落ち着けるよい場所を見つけました」と述べ、8枚の絵に着手したことを記しています(書簡1274)。

モネがノルウェー滞在中の2ヶ月で書き送った家族への手紙は現在25通(そのうち23通が妻アリス宛)が確認されています。義理の娘ブランシュ・オシュデに送った3月1日付の手紙には、ジャックや仲間たちと雪の中、橇で遊ぶ様子が記されています(書簡1276)。また、天気が変わり易く、白一色の雪景色を描くのが難しいことを吐露しています。一方で、雪はモネを大いに魅了しました。この雪景色にモネはまだ見ぬ日本を重ねます。「この国にいとよく思いますが、まるで日本のようです。日本の村に似ているサンドヴィーケンの眺めに取りかかっています。さらに、この辺りのどこからでも見える山も描いていて、それは富士山(Fuji-Yama)を思わせます。この主題はあまりに印象(les effets)が変わるので

6枚着手していますが、最後までやれるだろうか?」(書簡1276)。この山こそ、幾枚もの画布に描かれた標高380mほどのコルサース山です。モネは滞在した家から2キロほど北にある集落ヒルケルー(Kirkerud)で《雪中の家とコルサース山》を描きました。本作には変わりやすい天候の中、東に見えるこの山がひとときの穏やかな光に包まれる様子が描かれています。モネはさらに近くの丘から、コルサース山を異なる時間や天気で13点を描きました。刻一刻と移り変わる山の姿は、モネが^{しやうしやう}蒐集した葛飾北斎「富嶽三十六景」の富士山を思い出させます。

モネは予定を延長してノルウェーに滞在、わずか1ヶ月半で28点ほどの作品を制作しました。そして4月1日の夜、帰国の途に着きます。モネの書簡を紐解くと、厳冬の北欧への旅は、理想郷であるまだ見ぬ日本への心の旅だったようにも思われます。その四半世紀後、日本人・黒木三次夫妻がモネの邸宅を訪ね、《雪中の家とコルサース山》を譲り受けて、この作品はついに日本へ旅することになります。本作と日本のさらなる縁については、また別の機会にご紹介したいと思います。



* 文献1: Daniel Wildenstein, *Claude Monet, Biographie et catalogue raisonné, Tome III: 1887-1898 Peintures*, La Bibliothèque des Arts, Lausanne-Paris, 1979. このカタログは多くのモネの作品や書簡データを所収するモネ研究の基本文献です。本文の書簡番号はこの書籍に対応します。 * 文献2: Oscar Reuterswärd, 'Monet', 1948, in Charles F. Stuckey, ed., *Monet, a Retrospective*, Park Lane, New York, 1985, pp.166-173. 謝辞: ノルウェーの地名については、ノルウェー大使館にご教示いただきました。ここに御礼申し上げます。

令和3(2021)年度 教室受講生募集

上原美術館では令和3年4月からの
教室受講生を募集しています。

日本画教室

講師 牧野伸英先生(日本画家、日本美術院特待)
日時 毎月第2、4火曜日 13:00~16:00

デッサン・水彩画教室

講師 小野憲一先生(現代美術作家)
日時 毎月第2、4水曜日 13:00~16:00

仏像彫刻教室

講師 岩松拾文先生/大谷文進先生(仏像彫刻家)
日時 毎月第3日曜日
9:30~12:00/13:00~15:30

写経教室

講師 山田修也先生(書家)
日時 毎月第2日曜日 13:00~15:30

仏教美術講座

講師 当館学芸員(交代)
日時 毎月第2日曜日 9:30~10:30



会場 上原美術館アトリエ
受講料 無料(用材、写生会の施設入場料等は実費負担)
募集人数 若干名(応募者多数の場合は抽選)
受講条件 全日程に参加できる方、ご自分で通える方
(お1人1教室のみ応募可) ※初心者歓迎
応募方法 Eメールもしくは郵便はがきに氏名、年齢、住所、電話番号、ご希望の教室名、経験の有無を明記の上、2021年3月10日(必着)までにご応募ください。美術館受付でもお受けいたします。なお、応募結果は3月15日頃、応募者全員に郵送で通知します。
お申込み先 〒413-0715 静岡県下田市宇土金341
上原美術館「教室募集」係
Eメール info@uehara-museum.or.jp



特別展カタログ発行のお知らせ

知られざる 伊豆の 仏教美術

特別展のカタログを発行しました。展示したすべての仏像や仏画の写真と解説が掲載されています。1冊500円で美術館受付にて販売しています。詳細はお電話(0558-28-1228)またはEメール(info@uehara-museum.or.jp)にてお問合せください。



これからのイベント

学芸員によるギャラリートーク(作品解説)

開催中の展覧会の内容について、展示室で学芸員が作品を見ながらお話しします。
日時 会期中の毎月第3土曜日 11:00~(仏教館のみ)/13:00~(近代館のみ)
会場 上原美術館・展示室
参加方法 先着順 定員10名 ※当日、整理券を配布いたします・要入館券
※新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、やむを得ず中止になる場合がございます。詳細は当館ホームページ、公式SNSをご覧ください。



活動報告

調査活動 三島市内寺院 12月1日 伊豆市内寺院 12月14日
三島市で活動している「みしまのお寺めぐりの会」、各寺院の協力のもと、三島市内の寺院2ヶ寺の調査を行いました。
伊豆市では寺院、地元の方の協力により、1ヶ寺で江戸時代に造られた三十三観音の仏像(伊豆市指定文化財)の調査を行いました。本作は造像年代が分かる江戸期の仏像としても、また当時の地域の信仰が分かる資料としても貴重です。



出張授業 松崎町立松崎中学校 10月13日
静岡県立伊東高校城ヶ崎分校 10月17日
松崎中学校では昨年に引き続き、学芸員が奈良・京都方面で出会う仏像の見分け方や、歴史などのお話をしました。
城ヶ崎分校には、学芸員が美術鑑賞教育の出張授業を行いました。今年度は日本画材を取り上げ、実際に小さな色紙へ日本画を描く体験も行いました。



授業入館 松崎町立松崎小学校 11月20日
松崎小学校5年生が課外学習で来館し、学芸員が地元の文化財の紹介と、絵画作品の紹介を行いました。



職場体験受け入れ 静岡県立伊東高校城ヶ崎分校 11月19日~20日
今年度は城ヶ崎分校の生徒1名の職場体験受け入れを2日間行いました。内容は、学芸員の仕事を中心に、展覧会の立案や、作品の取り扱いなども体験していただきました。

講演 みしまのお寺めぐりの会講演 10月3日 下田市史講座講演 11月15日
田島整主任学芸員が、三島市で活動している「みしまのお寺めぐりの会」の第200回記念特別講演会にて、「伊豆の仏像の歴史~三島の仏像も含めて~」と題して講演を行いました。当日は感染症拡大防止のため、入場制限もありましたが、60名の聴講者となりました。また下田市教育委員会主催の下田市史講座にて「南禅寺仏像群と下田の平安仏」と題して講演を行いました。



静岡県博物館協会「これからのミュージアムを考えよう」11月3日
当館が加盟している静岡県博物館協会で、11月3日にシンポジウム「これからのミュージアムを考えよう」が開催されました。同協会の事業推進グループに当館の土森智典主任学芸員が参加しており、当日はシンポジウムの運営を行いました。本シンポジウムは新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、初めてYouTubeを使ったライブ配信を行い、一般の方にも広くご覧いただきました。



※昨年の河津桜のようす

仏教館で秋季に開催した特別展「知られざる伊豆の仏教美術」は、出品者の皆様のご協力のもと開催する運びとなり、多くのお客様を迎えることが出来ました。閉幕後は、出品いただいた文化財を無事にお返しすべく、再び展覧会担当者は東奔西走することになります。

次回展は上原コレクション名品選。コレクションの代表的な作品でお客様をお迎えいたします。本展覧会時期は早咲きの河津桜の開花時期と重なり、いつもであれば伊豆半島が活気づくシーズンとなるのですが、まだ新型コロナウイルス感染症の影響で、さまざまなものが今まで通りとはいかず、美術館としてもイベントが企画出来ないなど残念な状況となっています。今後はこの中で何が出来るか、手探り状態ですが、いろいろな工夫をして皆様に楽しんでいただけるような場を提供できればと考えております。

(櫻井)



特別展 横浜の仏像

2021年1月23日(土)～3月21日(日) 横浜市歴史博物館

横浜市に伝わる仏像を総合的・体系的に紹介する初めての展覧会。横浜に仏教文化がもたらされたのは奈良時代のこと。以来、この地には数多くの寺院が建立され、仏像が伝えられてきました。本展では横浜に伝わる個性的な仏像のうち、平安～鎌倉時代の仏像を中心に紹介し、初公開の仏像も多数展示。上原美術館の調査で見出され、横浜地域にかつてあった能仁寺の本尊であったことが明らかになった、河津町沢田、林際寺本尊の地藏菩薩像(南北朝時代)も里帰り公開されます。この像は南北朝時代の永徳3(1383)年に完成した、仏師・朝栄による現存唯一の仏像。横浜の方、仏像ファン、歴史ファンはもちろん、伊豆の方にとっても必見の展示です。

(田島)



企画展 みほとけのキセキ ～遠州・三河の寺宝展

2021年3月25日(木)～4月25日(日) 浜松市美術館

開館50周年を迎える浜松市美術館が、現在の静岡県西部にあたる旧遠江国と、隣接する旧三河国(愛知県東部)の古寺に伝えられる仏像の名宝を一堂に展示します。「平安鎌倉南北朝の美仏と令和に対峙する奇跡」「都からの仏教文化の伝播とその潮流の軌跡」の二つのキセキを目撃できる展示会とのこと。会期中は毎週イベントが目白押しで、4月10日の14時～15時30分は、本展担当の浜松市美術館の島口直弥学芸員と上原美術館の田島主任学芸員によるトークイベント「ガチンコ対談! 静岡のみほとけ 東へ西へ」(先着40名)も開催されます。担当学芸員の情熱あふれる意欲的な特別展。上原美術館が仏像の輸送などの技術協力をしています。会期が短いので観覧はお早めに。

(田島)

次回休館日は2021年1月12日(火)～1月22日(金)です(展示替えのため)



上原美術館
Uehara Museum of Art

開館時間
9:30～16:30
最終入館は16:00まで

休館日
展覧会会期中は無休
展示替え日のみ休館

入館料
大人/1,000円、学生/500円
高校生以下無料 *団体10名以上は10%割引